

などあつという間のこと。地球の上に風が吹き始めて、人の言葉が、生きものの言葉が生まれてから、いったいどのくらい経つたのかしら。そんなとしつきを数えてみたら、仕方がない。二百年などという数は、まあ、ほんの、かりの、たとえというだけのものよ」(二百年)

二十世紀が文学を文学史に収斂させてしまっているようないま、今年逝ったカート・ヴォネガット(一九二二—二〇〇七)の遺した言葉をあらためて思い出します。「文学作品を創造する人間が、頭の中に文学史以外のなにかをすでに持っているとしたら、どんなに新鮮だろう。文学の自家中毒は防がなくてはならない」(『バームサンデー』飛田茂雄訳、早川書房)。カート・ヴォネガットはドストエフスキーと誕生日がおなじでした。

斎藤成也

(人類学)

1 竹沢尚一郎『人類学的思考の歴史』世界思想社教学社、二〇〇七

国立民族学博物館に所属する著者が、民族学、文化人類学、社会人類学の歴史を概観した。マリノフスキー、プリチャード、モースなどの関係がわかり、自然人類学中心の勉強をしてきた私にとって新鮮だった。ミードを

頂点とする米國文化人類学への徹底的な批判もこちよ。でもまあ、民族学はやっぱり死に絶えつつあるのだとわかる。

2 原子光生『わんぱく勲章』自費出版、二〇〇七

私の父親が一〇年ほどまえに新聞に一年間連載した文章を単行本化したもの。不肖私自身が発行元。八〇年ほど前の、信州塩尻での子供時代の思い出満載。民俗誌としても、文字どおりわんぱく小僧の体験記としてもおもしろい。

3 長谷川三千子『パベルの謎——ヤハウィストの冒険』中公文庫、一九九六

畏友塩田光喜氏に勧められた本。旧約聖書創世記が、思想の異なる数グループの作者によって書かれた謎に迫る。ユダヤ教徒でもキリスト教徒でもない日本人の著者にしてはじめて書けたのかも。

4 W・サマセット・モーム著、中野好夫訳『剃刀の刃』講談社文庫、一九七八—七九

若い頃から何度も読んだ、モームの作品で最も好きなもの。今年になってこの作品に言及する文章を書いた時にまた読み直した。当時七〇歳近いモームが、神秘主義に魅せられた若者を主人公にしつつ、結局のところ人生は無意味なものだよと説いたんだなど、この歳になって思う。

5 魚戸おさむ絵／東周斎雅楽原作『イリヤ

ツド〜入矢堂見聞録〜』一一五巻、講談社、二〇〇二—二〇〇七

アトランティス大陸の謎を追いかけたコミック大作。山の老人、赤いうさぎ、ネアンデルタール人など、従来の大陸探索とはかなり異色な展開。でも最後は主人公の名前が示唆するように、トロイで終わってほしかった。

岩尾龍太郎

(思想史)

一年間ドイツでロビンソン変形譚を買い集め、図書館で古い本を読書中。偏った書評となるを諒承されたし。

1 クルト・リュートゲン『絶海の島 Auf einer Insel weit drüben im Meer』(Ravensburg 1981)

九つの孤島サバイバル譚。ペドロ・セラノは、神に祈っても助からないので悪魔にお願いし、謎の足跡に出会う。ロビンソンが謎の足跡を悪魔のものではないかと推測する場面を想起させる。セラノが孤島を憎んでいたのに対し、孤島を愛するに至るセルカークは周知の通りロビンソンのモデル。すこいのは、強制移住に逆らって海に飛び込み、一八八一年間孤島サバイバルした女インディアナ「ヴィクセヤナ」の話である。「鳥のように軽い」を意味する。傷ついたカモメを助けると、このカモメ「マラ」が彼女の元へ魚を運び、蟹

のダンスを見ろと羽ばたかす。雲丹の棘で足が腫れ瀕死状態のときに寄ってきたコンドルに対し、「マラ」は嘴を立てて追い返す。哀しい物語だが、最も哀しいのは、一八八年後、彼女の部族はすでに結核とジフテリアで死滅しており、彼女も四カ月後に死んでしまうことだ。強制連行され脱走した中国人籠が一四三三年から一九五八年まで北海道北方の原島で百合根やお稻荷さんの供え物を食いながら極寒の冬をサバイバルした物語も強烈である。侵略される側、する側、立場は違いが、横井小野田さんのサバイバルを想起した。ロビンソン物語が虚構の層の奥底に書き込んだ人間の生の原点が現れてくる事例の連続であった。

2 Paul G. Ehnardt『飛行士ロビンソン Flieger Robinson』(Herold 1934)

機械用語を駆使した引き締まった文体で、飛行機、南洋の知識を盛り込む。カンベ系の

技術教育的ロビンソン変形譚とも読めるし、ジロドゥー『シユザンヌと太平洋』と合わせて「不時着ロビンソン変形譚」を開始した作品とも言える。世界一周飛行に挑戦したフリードリヒスハーフェンの飛行士ハートムートの水上機「トランスオーシャン」が太平洋に墜落し、流されて孤島に漂着する。飛行機を分解し、部品をボートやラジオに転用し、七年間サバイバルの後、アホウドリの飛行を観察して、グライダーを組み立てる。第一号機「トランスオーシャン2」は分解部品と漂着木材、第二号機「アルバトロス」は孤島の植物が材料である。孤島で上昇気流に乗る練習を経て、二〇〇キロ西のマルケサス諸島のファッツ・ヒバへ着陸。オセアニア、アジアを周遊してドイツに帰還する。僥倖を待つのではない、あくまで自分で切り開く。鋼鉄の筋肉、技術の力、意志の勝利、というドイツ

的な物語。ただし、技術過剰ゆえに失敗し、自然に帰依するというパターン、さらに両者の総合として自然を技術として捉える目的論の視点も書き込まれている。ウィリー・プランク挿絵が簡潔に的を射る。

3 探索中の女ロビンソンものを二つ。
「エマ、女ロビンソン」(一八三四、取集家・研究者シュタッハによるKARI出版の復刻本)。サン・ドミンゴ黒人反乱で追われフランス本国で破産した白人父娘が南米に向かう途中に遭難。娘がギターを奏でながら健気にサバイバルして父親による救出を待つ。単独サバイバル部分はカンベの模倣。島の反対側でサバイバルに失敗したデュバル夫人と娘ヘンリエッタに出会ってからは異例な展開。無能な夫人は死に、死臭が漂う。母の死が分からぬ少女を生徒と見立てエマは教育を始め

ブックレット《アジアを学ぼう》
第一期全7冊
植民地台湾を語るということ
八田與一の「物語」を読み解く
胎中千鶴著 今も「台湾農業の大恩人」と顕彰される技師への日台の語りから、「歴史問題」を再考。630円

東南アジア年代記の世界
黒タイの「クアム・トームオン」
櫻永真佐夫著 ベトナムの山峡に王統譜継承の転変を追い、少数民族の波乱の歴史をたどる。840円

風水思想を儒学する
水口拓寿著 儒教側の批判を克服し成長した風水。中国思想史の巨大な「格闘技」をたどる。840円

清朝の蒙古旗人
その実像と帝国統治における役割
村上信明著 藩部統治を担ったモンゴル旗人。その言語能力・仏教信仰を史料でたどる。735円

在日朝鮮人のメディア空間
占領期新聞発行とそのダイナミズム
小林聡明著 民族の行く末を模索し続けたメディア群。膨大な資料から越境する魂に迫る。840円

ビルマ古典歌謡の旋律を求めて
書承と口承から創作へ
井上さゆり著 「ビルマの堅琴」の音色とは何か。技法の伝承に見る、アジア伝統音楽の核心。735円

モンゴルの仮面舞儀礼チャム
伝統文化の継承と創造の現場から
木村理子著 ラマ僧齋清で断絶したチベット仏教の秘儀・チャム。再興を追うドキュメント。840円

風響社
〒114-0014 東京都北区田端 4-14-9
〒03-3828-9249 (定価は税込み)
URL: http://www.fukyo.co.jp